

墓地が出来たのは明治三十年代で鉄道開通時

墓の形式には、夫々時代の様式があるというが、福嶋初め根上町の墓制全体が「明治形式」であると、専門家が指摘する。

特に前田藩政時代は前に示した「二日読み」の項目には「百姓は農耕のみで後生願いをすべからず」等のきつい掟があり、死亡者の墓を建てることも容易ではなかったし、もし墓をと考えても、河原から拾ってきた石が墓であった可能性が強い。

また、日清戦争の後、日本政府はロシアに対する戦争準備で、対岸に渡るため敦賀の港までの鉄道敷設は、一刻を争う政治的課題であった。

従つて清国との戦争の戦死者には、多額の金を下賜し、戦意の向上をはかる意図があったし、当時の墓建設には、友人同士が発起人になっているのを見ても村挙げての事業であつたように見える。

福嶋の墓は、日清、日露戦争を経て、鉄道建設と相俟つて現在の墓地が確立したと考える。

死亡した後の焼き場は昔、ろ番地の福嶋の最も北辺にあつたのも村立ての常道であつた。

芳名録に明治以前の死者の法名が刻まれているが、調べてみた限りでは順番が間違っているのを見ても、後で、檀家寺で調査して載せたものであろう。

姓の無かつた時代の物故者は、過去帳でも特定が困難である。

鉄道線路予定江筋調査書と墓地・線路図

明治二十九年五月六日文書

